

平成30年度 第1回東広島市総合教育会議 議事録

- 1 日 時 平成30年10月19日(金)
開会16時00分 閉会17時20分
- 2 会 場 東広島市役所本館3階303会議室
- 3 出席者 (構成員)
東広島市長 高垣 廣徳
東広島市教育委員会
教育長 津森 毅
委 員 渡部 和彦(教育長職務代理者)
委 員 坂越 正樹
委 員 織田 壽子
委 員 長嶋 香穂里
- (その他の出席者)
学校教育部長 大垣 勇人
生涯学習部長 國廣 政和
生涯学習部次長兼生涯学習課長 鳴川 正勝
指導課長 祭田 学
保育課長 片岡 隆夫
- (事務局関係)
総務部長 倉本 道正
総務部次長兼総務課長 大島 隆
総務課 課長補佐兼行政経営係長 中川 道浩
行政経営係 主査 早坂 康弘
- 4 欠席者 東広島市教育委員会 委員 京極 秀樹
- 5 議 事 東広島市教育大綱の改定に当たって
- 6 内 容
○開 会

○高垣市長あいさつ

○議 事

東広島市教育大綱の改定に当たって

<高垣市長>

それでは早速でございますが、議事に入ります。

まず、「東広島市教育大綱」について、事務局から説明をお願いします。

<事務局>

(事務局説明【資料2】)

<高垣市長>

ありがとうございました。

事務局からも説明がありましたように、教育大綱の策定には、国の教育振興基本計画を参酌する必要がございます。

本年6月に策定された国の第3期教育振興基本計画における教育施策の重点事項では、個人と社会の目指すべき姿として、「多様な人々と協働しながら新たな価値を創造する人材の育成」や「一人一人が活躍し、豊かで安心して暮らせる社会の実現、社会の持続的な成長・発展」が掲げられるとともに、「超スマート社会の実現に向けた技術革新」の中で、若年期の教育、生涯にわたる学習や能力向上が求められております。

本日は、こうした重点事項を踏まえまして、今後大綱の素案を作成する上での参考とさせていただくため、5つのトピックスと申しますか、論点を掲げながら、意見をお伺いしていきたいと思っております。

【資料1】をご覧ください。本日のトピックスとして、(1)から(5)までを掲げております。

(1)は、政府においても、「乳幼児・就学前の教育・保育」の重要性ということがあるのだろうと思いますが、来年から無償化が始まるという環境の中で、どのように今後教育を展開していくかということがあります。

2番目は、「市の特色ある教育スタイルを活かした、課題発見と多様な状況における課題解決力の育成」としてしています。これは、県において「学びの変革」が本格的に推進されておりますが、それと呼応する形で、呼応するといいますか、それ以前から東広島市はまさに学びの変革を先導してきたのではないかと思っておりますが、今後どのようにこの変革を推進していくのかというのが一つあります。

3番目は、「義務教育から高等教育に向けた理科系教育の強化」ということで、これからの時代は、「第4次産業革命」でありますとか「Society5.0」であるような、IT、ICT、あるいはロボットという新しい時代を迎えている中で、どのような教育を義務教育段階でも推進する必要があるのかという論点になると思います。

それから4番目、「知的資源との連携による学習意欲の促進と、異なる文化への寛容性の育成」。実は、本市には既に外国から約7,000人の人たちが来られていて、人口シェアでいうと3.7%を占めています。いずれは10,000人くらいになると言われているのです

が、その中で、異なる文化への寛容性というものを子供たちに持たせていく必要があるのではないかという論点です。

それから5番目は、「市全体を生涯学習のキャンパスに」ということですが、非常に本市も高齢化が進んできました。100歳超えの方が120名もいらっしゃって、平均寿命も大変高くなってきたということで、まさに「人生100年」の中で、どのように豊かに生涯を過ごしていただけるか、あるいは健康寿命をどう伸ばしていくかということが、大変重要な課題であり、生涯学習の重要性というものが増しているのではないかと。

このようなことを今日はトピックスとして出ささせていただいて、それぞれご意見を賜ればということでございます。

それでは順次(1)から進めさせていただき、それぞれご意見を賜ればと思います。

まずは、津森教育長からお願いします。

<津森教育長>

トピックスの(1)ですが、就学前教育あるいは保育の質の充実ということでございますけれども、まず、家庭教育の中の問題、特に貧困という問題があります。しかし、貧困でなければ良いかというところでもなくて、なかなか昔のような子育てが難しい家庭が増えてきているという状況があるかと思えます。

こうした中で、これは以前から「小1プロブレム」という言い方がされていましたがけれども、小学校一年生で、席に着いて学べないという子どもが増えてきたということも背景にあって、小学校教育のスタートを円滑にするための課題にもなるのではないかと思います。これについては、公立の幼稚園が本市には二つあるわけですが、この二つについては、それぞれの地域の小学校と過去十数年、連携をしてくれています。

しかし、保育所との連携はどれだけあるかということ、まだ心もとない状況がある中で、ほとんどの子は保育所、あるいは私立の幼稚園に通っているわけでございます。こうした状況は、本市だけではありませんが、市によっては、小学校と幼稚園が隣接していたり、校長と園長が兼務したりしているところもあるわけですが、そういった市町とは環境が少し違いますが、これもやはり重点的にやっていかなければならないと考えております。

<高垣市長>

ありがとうございました。それでは、渡部委員、お願いします。

<渡部委員>

私からは、先程市長が話された高齢化という問題についてですね。これは、何番からでもいいんですか。

<高垣市長>

一応、(1)から順次お伺いしていこうかなと思います。もしその項目で特にご意見がないようであれば、言ういただければと思います。

<渡部委員>

はい。本市には大学が4つもあるとよく言われるんですけども、そういう研究機関、教育機関との連携というものが、どうもまだじっくりいっていないと感じています。こうしたところを見なおして、本市の教育もそうですけれども、生涯学習という点からも、もっと大学の機関を活用するという視点に立って、具体的に取り組む必要があるのではないかと思います。

例えば、各地域に高齢者の方々がたくさんおられるわけですが、その高齢者の方々にどのように生きがいを持ってもらうか、あるいは、その生活の中に積極的に入っていけるかとか、そういう取組を、研究機関の視点から、どうすればもっと合理的にできるかとかですね。一部やっているところもありますけれども、研究対象とするというか、そういうことをもっとやるべきではないかと思えます。

それから、大学には留学生がたくさんいらっしゃいますが、留学生との交流といいますか、地域でボランティアとしてやっているところもありまして、もう少し積極的に、組織的に交流の場を組んでいくといいますか、そういう活動が必要ではないかと思っています。

幼児教育に関しまして、広島大学には幼児教育の研究機関もありますが、そういった知見をもっと現場の幼稚園教育に波及していくことも必要なのではないかと思います。私も以前広島大学に勤めていた時に、幼稚園の授業の担当というか、アドバイスをしたこともございます。具体的に現場での指導上の問題を聞いていくとか、学術的な点から、指導なり情報提供ができるように、逆に言えば、大学が現場からそういったことを引き出すということが必要ではないかと思っています。

他の点については、後ほどお話ししたいと思いますが、まずは大学をもっと活用しようということが私の基本的な考え方でございます。

<高垣市長>

どうもありがとうございました。

包括的に見ていただいて、大学との連携の重要性ということをご指摘いただきました。本市は大学のまちとして成長してきたわけですが、私も就任して約9か月になってまいりまして、大学との連携がなかなかできていないなと思うところがあります。

例えば、主にわが市を研究のフィールドとして使っていただく、研究テーマの中で本市を使っていただくというのがありますし、また、我々の方から大学にアプローチして、大学の知的支援をいただきながら子どもの教育をやっていくというのが大変重要な視点だと日頃から思っておりまして、渡部委員の言われるように、やはり本市ではいろいろな分野でこうした意識は必要なのかなと思いました。ありがとうございました、

それでは続いて、織田委員お願いします。

<織田委員>

私が気付いたことは、今年、幼稚園教育要領と保育所保育指針が改定されて、保育指針に

「教育」という言葉が出てきているんですね。今まではどちらかといえば「養護」、育てていく、安全にしかも健全な育て方をしていくという視点であったのが、「教育」が入った以上は、これからちょっと変わっていかねばならないのではないかと思います。

県では、乳幼児教育支援センターを新設されたとのことですが、これは義務教育課ではないということですので、市も、こども未来部と教育委員会が、互いにどのように教育に関わっていくか、新たに何か作るのか、歩み寄って、一つの教育内容を検討していく必要があるのではないかと課題があります。

それから、内閣府が、就学前には、どこに行っても同じような教育が受けられることを願っているということも伺っております。そうすると、それぞれ独自の特徴を出した教育をしている私立幼稚園などをどのようにするのかというのも課題ではないかと思います。

それから、保育士の皆さんが、今までは養育だけに力を入れてこられたものが、新たに教育が入ることによって、やはり研修をしていく必要があるのではないかと、今からは保育士さんの質も検討していく必要があるのではないかと思います。

最後に、小学校との接続ということで、私もかつて学校におりましたので、寺西小学校にいた時には、一年に一回、寺西地区にある幼稚園、保育所に就学前の子ども、6歳児を集めて交流をしておりました。しかし、ここでいう接続教育はそんな簡単なものではないと思います。小1プロブレムのための交流であるとか、教育内容についての交流が必要だと思います。先程教育長もおっしゃいましたが、尾道や福山では、小学校と幼稚園、保育所が結構近いところであって、交流が容易な場合もあると思うのですが、東広島市では、必要であれば交流するためのバスをチャーターするなどしなければならないのではないかと思います。

いずれにしても、新たな幼稚園教育要領と保育所保育指針を踏まえて、いろいろな面で考えていかなければならないのかなと思います。

<高垣市長>

ありがとうございました。

就学前教育で保育と幼稚園、保育にウエイトを持つところと、教育にウエイトを持つところとの連携をどうするかということについては、県の方でもいろいろと課題がありまして、教育委員会にセンターを作り、教育プログラムを作っていこうということになったんですね。ご指摘のように、我々も、こども未来部と教育委員会とで今後どのように対応していくかについては、課題であると思います。

それと、就学前の保育所・幼稚園と小学校との連携は、場所的に近いというのは理想ですよ。連携のためのアクセス性をどうするかということも、確かにご指摘のとおりだと思います。ありがとうございます。

続きまして、長嶋委員、お願いできますか。

<長嶋委員>

幼児期は親だけでなく、保育所、幼稚園、また祖父母や地域の方など、多くの力で子育てをしていくのが大切なのではないかと思いますが、最近の子育ては、祖父母世代にとって大

変ギャップがあるという話をよく聞きます。

そこで、祖父母世代と親世代とのギャップを解消するために、祖父母の方や地域の皆さんに、今の子育ての現状を学んでいただく機会を多く設けてほしいなと思います。それから、広報紙などでもこうした機会の情報を提供して参加していただいて、今の子育てに合った祖父母の方の関わり方といいますか、親世代を支援する取組も考えていただきたいと思います。

それから、保育の質というところで、保育園に入らせていただく機会があり、保育士さんの話を聞いたりするところでは、やはり保育の質を高めるには研修などが大切だということです。しかし、保育士にも余裕がなく、外に出て研修を受けるのが難しいという現状があるようです。もっと東広島の中で研修ができて、保育の質を高めるための機会を増やしていただきたいと思います。

<高垣市長>

どうもありがとうございました。

確かに、子育てについての世代ギャップというものがあって、どのように保育していったらいいか、幼児教育をしていったらいいのかというのは大きな問題ですね。こうしたギャップを埋めるような取組を、おそらく県のセンターでも試行していると思うんです。そのあたりの情報も取りながら提供していけたらと思います。

それから、保育の質の向上ということで、市独自の研修制度はどうかというご指摘でした。ありがとうございました。

それでは、坂越委員、お願いします。

<坂越委員>

乳幼児教育、保育については、後々の小中高、大人になってからの影響力が大きいというのは、実証的にデータが出ているところですので、やはり一つのメイン、柱になるだろうと感じています。

これまで意見が出ているように、このことに関しては、県がすごく力を入れて動いていらっしゃると思います。先程言われたセンターは、確か八本松の教育センターの中に作るという話ではなかったでしょうか。

<高垣市長>

最初は、県の教育委員会の中に作るという話であったと思います。

<坂越委員>

また、いずれ八本松の教育センターにも位置付けるというような話も聞いていますので、もちろん市にも主体的に取り組んでいただければ良いと思いますが、やはり県との連携ができれば、より広がりや深まりもあろうかと考えています。

渡部委員が言われたように、広島大学の中に、県の施策の中で幼児教育の中心的な役割を果たしておられる先生もいらっしゃるのです、そのお知恵もお借りするということもあるだろ

うと思います。

それから、長嶋委員が言われていましたが、幼稚園教諭や保育士の質を考えると、一つには、保育士が不足し、延長保育など多忙化する中で、研修の時間が全然取れないという声が現場にあるので、これを私立の連盟だけに任せておくのも少し厳しいのかなという実態があるようです。このあたりのサポート、幼保の仕組みを動かすのと同時に、家庭という部分も大事になってくるだろうと思います。ただ、行政が家庭にどれだけ関わっていいのか。国の施策には家庭の部分もやるんだと書いていますが、家庭に関わろうとしたときに、どこがキーステーションになっていくのか。こうした仕組みづくりなども課題ではないかと考えています。

<高垣市長>

ありがとうございました。

県との連携、あるいは保育士、幼稚園教諭の質の確保について、これを市のサポートとしてどういうことができるのか検討する必要があるとのことでした。

それから、家庭の重要性ということについては、市の方でも、ネウボラというものの中で、将来的には、教育機能あるいは保育機能というものを少し採り入れながら、家庭をサポートしていくという方向で進めているところです。これは県においても同じだと思うのですが、まだスタートしたばかりですが、こうした形で家庭へアプローチしていこうと考えています。

先ほどのセンターについてもそのようにしていると思いますが、家庭の重要性を視野に入れながら、プログラムであるとか教育の仕方を考えていく必要があるというご指摘でした。ありがとうございました。

それでは、2番目です。

「市の特色ある教育スタイルを活かした、課題発見と多様な状況における課題解決力の育成」という視点から、津森教育長からご意見をお伺いしていきたいと思います。

<津森教育長>

これについては、本市のこれまでの実績といいますか、伝統というところには一定の自負を持っているところでございますが、「多様な状況における課題解決力」ということについての考え方はまだ、私自身明確になっていないところではあります。

ただ、一つ言えることは、本市の高い教育力を支えているのは、教職員の情熱と指導力だと私は思います。大量退職、そして若い教員が増える、しかも昨今の状況の中で教職員の志望者が減っていく。こうした中であって、若い教職員をどう育てていくのかというのが一番の課題だと考えております。

<高垣市長>

ありがとうございました。

先日、酒まつりの時にくららで、「白壁の街」や「組曲『西條』」を観た際に、本当に東広島市の教育力は高いなと、これはやはり先生の情熱なくしてここまでできないなと思ったので

すが、これを今後どのような形で、維持・発展していくのか考えていく必要があるなと思ったところです。

それでは、渡部委員、お願いします。

<渡部委員>

本市では「和文化」を一つのキーワードとして、各学校で非常に充実した取組が行われていると思います。将来的な話を申しますと、これからだんだんバーチャルの時代になってきて、本物と自分が実際に体験していることが、かい離してくる時代になってくると思います。

そういう中で、やはり体験型の教育をしっかり指導できる先生方の取組というか、教育プログラムを組織的に作っておく必要があるのではないかと考えています。

<高垣市長>

ありがとうございます。

これからの社会に向けて、体験型の教育プログラムの必要性をご指摘いただきました。

それでは、織田委員、お願いします。

<織田委員>

本市の特色ある教育スタイルとして、教育長がおっしゃったような教師の情熱とか指導力というのがあると思います。また、「東広島スタンダード」や「一校一和文化」、こういったものも東広島の教育スタイルであろうかと思っています。

「東広島スタンダード」は、当たり前のことが当たり前にできない時代になっていることから、お互いに生きやすい、生きていくのに楽な社会になるよう、挨拶や返事などをきちんと大事にしていこうということを、子どもたちに身に付けさせたいというねらいがあると思います。

「一校一和文化」は私も指導したことがあります。先程市長もおっしゃったように、すごく労力を使うんですね。皆さんに観ていただいて、見応えがあるものでもありますが、やっている子どもたちにとって、一生懸命取り組んだ成果は、数値に出せる学力ではなく、体験による心の教育というものが非常に大きいと私は思っております。そういうものを大事にする東広島市であってほしいと思いますし、これからも続けてほしいと思うんです。

それと「課題発見と多様な状況における課題解決力」についてですが、県が学びの変革を数年前から掲げていますが、私たち昔からやっている教員にとっては、「これはすでに東広島市でやっていることよね」という感じなんです。ただ、ご存知のように今、若い先生がたくさんいらっしゃいます。かつての伝統的な東広島の教育を、どのように伝えるかというのが大きな課題ではないかと思っています。「不易と流行」という言葉がありますが、不易が基盤になって流行があると私は信じております。不易のものの上に、その時代にふさわしい流行があるのであって、不易の部分を年配の教員であるとか、OBがきちんと教えていかないと、東広島の伝統である教育が、だんだん忘れられていくのではないかといつも憂っております。

以上です。

<高垣市長>

ありがとうございました。

本市の「東広島スタンダード」、「一校一和文化」というのはまさに心の教育であると思います。全員であれだけのことができる先生の指導力はすごいなと思ったんです。相当の熱意をかけないとあそこまではできない。その過程で子どもたちが成長していく。1年生から6年生まで、中学校であれば1年生から3年生までの集大成があの場合に出ているのがすごいと思ったんですね。

最後にご指摘のあった「不易流行」ですが、私は最近、守るべきものは守りつつ、それを伝承しながら、その上に更に何を加えていくのかということが重要であると思っています。そのようなご指摘かと思えます。ありがとうございます。

では、長嶋委員、お願いします。

<長嶋委員>

今、市長が和文化教育の中で、教員が素晴らしい指導をされるとおっしゃいましたけれども、この中には、家庭での保護者の方の力、協力がなければできないことではありません。やはり家庭での応援があるからこそ、子どもたちは頑張っていけるわけで、家庭と学校との連携で、この素晴らしい心の教育ができていると思います。

「東広島スタンダード」に関しても、学校だけではなくて、家庭にもしっかりと浸透してきています。

先ほどの幼児教育とも関連すると思いますが、家庭でどのように学校の教育に関わっているかがとても大事ですし、そのために東広島市の教育をもっと保護者の皆さんに知っていただき、協力していただくということが大切ではないかなと思います。

<高垣市長>

ありがとうございました。

また確かに、保護者の協力なくしてあれだけのことはできないと思います。

くらの大ホールは1, 200人入るのですが、一杯になるんです。おじいちゃんおばあちゃんも含めて保護者の方が参加して一体となって演じていると感じました。これは学校教育と家庭が一体となった東広島の素晴らしい教育であると思います。

そういうことをより多くの保護者の方にも発信していくことが大切であるというご指摘でございました。ありがとうございました。

では、坂越委員、お願いします。

<坂越委員>

この項目の「特色ある教育スタイル」ですが、市長が言われるように各学校がすごく頑張っておられて、子どもたちに成果を出しておられると思います。

ただ、若い先生が沢山入って、教員の世代がこれほど入れ替わってきて、一方でなかなか定足数を充足できないような状況の中で、西条教育の伝統をどうつないでいくのかというの

は大きな課題だと思います。

織田委員が言われるように、やはり年配の人たちが、若い人たちにきちんと伝えるべきことを伝えることは必要だろうと思うのですが、若い世代に「これは必要なんだ」「これは大事なことなんだ」と言うだけではなかなか伝わらないと思うんです。なぜこれをやらないといけないのか、この子に向き合う時にこれが必要なんだ、これがずっと西条でやってきた教育なんだということを、若い世代の教員が体と頭で分かるような校内研修や、職員室での先輩後輩の文化のあり方をぜひ考えていただきたいと思います。

それから、本当に答えがない時代に、答えがない問題に対してどう取り組むのか、これはこれからの子どもたちに求められる力だろうと思います。ただ、この項目がそのまま大綱の項目になるとは思いませんけれども、学校に「これが東広島学校教育の一つの柱だ」といったときに、先生方がどう理解するのか、どこまでわかってもらえるかとも思います。

もちろん、大綱の柱として掲げるのは良いと思いますが、学校と一緒にやっていこうとしたときの基本的な原動力は教員だと思いますので、教員の先生方にどういう風にかみ砕いて斟酌してもらって、我が物にしてもらうかという工夫が必要ではないかと思います。

<高垣市長>

ありがとうございました。

ご指摘のように若い先生をどのように育てていくのか、あるいは今ある西条教育をどう伝承していくのかが、私も非常に重要だと思っています。

市の大綱と広島県の大綱を比較したのですが、県の大綱には、教職員の力を最大限に発揮できる環境の整備であるとか、教員の皆さんに対してどういう施策を打てるのかというのが項目として挙がっています。今の市の大綱にその項目はなかったように思います。

大綱の中にどのような形で入れていけるのか研究しながら、良い教育をいかに継続的に続けていける体制を作るのか、人材を育てていくのかというのは大変重要であるので、しっかり考えていくということにさせていただきたいと思います。

それでは3番目に移ります。「義務教育から高等教育に向けた理科系教育の強化」ということで、津森教育長、お願いします。

<津森教育長>

高等教育に向けたという意味では、なかなか私も分からない部分があるのですが、昨年4大学の学長さんと話をしたとき、世界標準の学力と心を持った子どもを育てるために、大学としっかり連携したいということをテーマといたしました。

その観点から言えば、社会情勢の様々な変革に当たっては、理数教育の重視というのは避けて通れないものであるかとは思いますが。

ただ、どうしても義務教育は学習指導要領に基づくものでありますので、その中でどう進めていくのかということをお考えすると、二つくらいあるかなと思うのですが、手法としてはよくやりますけれども、一つはモデル校的なものを作りまして、そこで進めていくというものがあります。

もう一つの側面からのアプローチとしては、個別のしっかりした力、圧倒的な興味関心を持った子どもたちの「もっと学びたい」というところを伸ばすということです。例えば、漢検、英検などがあるように、数学検定もございますし、あるいは大学の先生に協力いただいて出前講座をやっていくなど、学校カリキュラムを離れて、伸びる子どもにはしっかりその場を用意するということを考えていく必要があるのかなと思っております。

<高垣市長>

この項目がなぜ挙がったのか、委員の皆さんは少し唐突に思われたかもしれません。実は、この話は4月に湯崎さんがこの地に来られて、いろいろな行政課題を議論する中で、「高垣さん、この地はSTEM教育を展開すると面白いね」と話されたんです。STEM教育というのは、サイエンス、テクノロジー、エンジニアリング、マスマティクス、数学ですね。こうした理科系教育が、大変重要になってきているという認識がアメリカであります。世界もそういう認識になってきた。冒頭申し上げたような、これからの新しい時代というのは、AIであるとかIoTであるとか、ICT、あるいはロボットといった形の時代であって、プログラミングができるような子どもも育てて行かなければならない。こうした環境の中で、それが大変重要ではないかという指摘があります。

前の文化庁長官の坂東さんとお話しした時に伺ったのですが、最近はそこに「Art」、芸術が加わるということです。創造性のある「Art」が加わってくると。だから、これから子どもたちが課題を見出して解決していき、更に創造力を持つためには、やはりSTEM教育は必要なのではないかと思ったんです。

これについては教育長とも話しましたが、義務教育でそういうものをカリキュラムに採り入れるのは、なかなか難しいところもあると思います。その中でどういう形で入れていくのか。例えば、「一校一和文化」のように総合教育的に展開していくことができるのか。実は、これは私が非常に大きなテーマとして考えておまして、採り入れるとしてどのように皆さんに共感を得て、教育を実施できるのか。私自身の課題であったものですから、問題提起として今回の話題に入れさせていただいています。

渡部委員、いかがでしょうか。

<渡部委員>

これは、「理科教育」ではなく、「理科系教育」と書いてありますので、総合的な自然科学に対する理解ということであろうと思いますが、中学校の研究事業等で実験などを拝見した経験から申しますと、先生の指導スキルといいますか、実験するためのスキルに大きな差があるのではないかと思います。これは先生方をお願いということでございますが、実験というのは一つの体験ですので、仕組みが分かる、あるいは苦手な子どもも食いついてくるような指導方法を工夫する必要があると思います。子どもに分からせる課題というのは、具体的に化学や物理などにおいても様々ありますが、クラスの全部が感動を持って「そうだね」と分かってくれるようなプログラムができて、それを追体験できるというスキルがこれからは大事だと思います。

そういった意味では、先生方にもう一度、実験の提示とか、論理の示し方、理解のさせ方をしっかり勉強していただくとか、そういう能力を身に着けるための研修が大事ではないかと思えます。

<高垣市長>

それは冒頭おっしゃった、大学の先生と学校現場の教師とが連携して、例えば東広島の小学校や中学校をフィールドとしながら、プログラムをそこで作りあげていくという形での展開ということでしょうか。

<渡部委員>

はい。それは新しい斬新な方法だと思います。中学生、高校生の理科でも能力のある子は、ぱぱっと新しい発想でモデルをつくったりできるんですね。そういう才能を持った子を見出して、理科好き、自然科学好きの子どもたちを増やしていくことができるのではないかと思います。

それから、実験というとやはりお金がかかりますので、いかに効率よくポイントを押さえた実験プログラムができるかということも大事なポイントかと思えます。

<高垣市長>

はい、どうもありがとうございました。それでは、織田委員、お願いします。

<織田委員>

私には、ちょっと答えにくいことですが、渡部委員が言われたように、子どもが興味・関心を持つような指導法を教師が身に着けていると、そのクラスは、理科、自然科学などに興味・関心を持つ傾向があると思えます。

教員全部にそうなりなさいというわけにはいかないもので、教育委員会で、ここの学校はそういうことに力を入れてほしいという指定校のようなものを作って、やってみて、それをどのように他の小中学校に広げていくかということから始めないと、いきなり理科系に関心を持つ子どもを育てるにはといても、具体的な課題はすぐには分からないと思えます。

<高垣市長>

どうもありがとうございました。それでは、長嶋委員、お願いします。

<長嶋委員>

すみません。私はもっと答えにくいのですが、思ったことを素直に言わせていただきます。

例えば、科学研究などはどうかと思えます。科学研究も「やらなければいけない」のでやっているところがあります。そしてこれは保護者の大きな負担になっていることでもあるのですが、やはり、子どもと保護者が一緒にいろいろなことを発見するなどして、科学研究を楽しんでやっていくところから、渡部委員、織田委員が言われたようなことにつながって

けば良いと思います。

<高垣市長>

ありがとうございます。

なかなか厳しいご意見をいただいております、これからどのように展開すればよいかかと考えているのですが、例えば、先日三ツ城小学校で、マイスターというカリキュラムがありました。子供と保護者、先生も一緒にほぼ一日かけて、かんなを使って箸を木から作っていくという県の職業教育なのですが、そういう中で子どもがモノづくりに興味を持っていくというものです。

もちろん、プログラミングというカリキュラムもあるんですが、外の機関の力を借りると、プログラミングに関心を持たせるということもできるような仕組みがあるようなんですね。このように他の機関の力も借りつつ、保護者と一緒になってやってくというような仕掛けをしながら、自然科学やものづくりに対する関心を持ってもらう環境づくりも必要ではないかと思えます。お二人のお話を聞いていると、こうしたものがないとやや唐突感があるのかなと感じました。

坂越委員、いかがでしょうか。

<坂越委員>

昨年度、年と言えば今年ですけれども、教育委員会の現地視察で横浜に行ったときに、慶応大学の理工学部と地元の小学校が連携して、子供たちが慶応の研究室でいろいろなことをさせてもらうというモデルを見てきました。大学との連携、あるいは企業との連携も踏まえながら、そういう取組も一つあるのかなと思いました。

理科系教育、これは、広い意味で国が言っているような Society5.0 とか、SDG 's の目標を意識したような教育もあるでしょうから、広くこれからの社会に生きていける力をつける、そういう教育として位置づけられればいいのかと思いました。

また、教育長も悩んでおられるようですけれども、公立で理科系教育をやろうとしたときに、全体の底上げを図るのか、それとも特化したプログラムとして伸びる子を伸ばすのかということがあります。もちろん、どちらもやらなければならないということをお前提としながらも、個人的な意見として、もし、特化プログラムとしてやるのであれば、本当に「やりたい」という子どもを集めて、大学と連携して、最先端のプロジェクトを組んで実施するのは面白いなという感想は持っています。

<高垣市長>

ありがとうございます。これは、やはり広大、近畿大学工学部と連携しながらやっていると、この地しかできないような教育ができるのではないかという気がするんです。

これについては、今日はおいでいただけていないんですけれども、京極委員からもご意見をいただいているんです。後ほどペーパーをお配りしますけれども、ピックアップしてお話しすると、「以前の総合教育会議でも、津森教育長から理科教育に関しては、重要視していき

たいとのことでしたので、近畿大学工学部内でも検討を行っていただいています。広島大学、広島国際大学、さらには研究機関との連携の中で有機的に連携した具体案を提言する必要があると思います。」ということで、少し前向きなご意見もいただいております。

京極委員は、3Dプリンタの第一人者でいらっしゃる、そういうものを近畿大学で実際に子どもたちが見る中で、ものすごく興味を覚える可能性もあると思います。この話はまさに大学連携になってくると思います。

近畿大学では、先端技術に触れる場として、新しく研究所を作られています。その「次世代基盤技術研究所」で講習会、公開講座等をやっておられるようですので、小学生には少しレベルが高いかもしれませんが、見るだけでも何か変わってくるかもしれません。また京極委員にご出席いただいた際には、ご意見を賜りたいと思っておりますので、参考にさせていただければと思います。

大分時間が押してきたんですけども、4番目の「知的資源との連携による学習意欲の促進と、異なる文化への寛容性の育成」について、津森教育長からお願いします。

<津森教育長>

はい。外国人の方たちが増える中で、その人たちの日本語での生活、あるいは学習支援をするのと同時に、子どもたちにとっても外国との接点がふんだんにあるということプラスに捉えて、様々に取り組んでいきたいと思っております。

<高垣市長>

はい。ありがとうございました。では、渡部委員、お願いします。

<渡部委員>

はい。知的資源との連携、また異なる文化への寛容性ということですが、これについては、よく外国人とお付き合いすればいいという話もあります。

本市には、たくさん外国人がいらっしゃるのですが、これも一つの方法だと思いますが、それとは別に、スポーツや芸術、外国の文化というもの、例えば「絵」をどう面白く他の人に伝えるかというソフトづくりを子どもたちが自分の力ですするためには、その文化・背景をきちんと理解していなければできません。そういった指導内容や指導方法なども大事なのではないかと思います。

<高垣市長>

ありがとうございます。織田委員、お願いします。

<織田委員>

はい。東広島市の子どもと、外国の方との触れ合いについては最近ずっと増えています。先程ありましたように、外国人の方は市内に7,000人いらっしゃるということでした。かつて私が御菌宇小学校で外国語教育をした時には、2000人でしたから、ずいぶん増え

ているということなのですね。

英語を話すわけではなくても、一緒に何かをすることによって、いつの間にか子どもたちの外国の方に対する偏見や違和感がなくなっている。そういうことが小学校の教育の中であったような気がします。まずは、東広島市は、そういう意味での環境に恵まれているから、しっかり触れ合うということ、一緒に何かをすること、小学校のときにはそういったことが良いのかなと思います。そういう段階であると思います。

私の近所にも中国の方が何人か住んでいらっしゃるし、ごみの出し方などお伝えしたことがございます。一昔前だったら考えられないことが東広島には起こっていますので、徐々に寛容性は育つのではないかなと感じております。それを上手に学校教育に取り入れていくことは、これから教育委員会の方で考えていただかなければならないと思っております。

<高垣市長>

ありがとうございました。それでは、長嶋委員、お願いします。

<長嶋委員>

東広島には外国人が7,000人いるということですが、地域によっては、大勢いるところもあり、また少ないところもあって、織田委員が言われたように、自然に生活の中で触れ合うことができるところと、そうでないところがあると思います。ですから、そういう地域、保護者にも子どもたちにも、自然に触れあってもらえるような体制というか、そういうものも考えていただけたらと思います。

<高垣市長>

7,000人と言いながら、実はかなり地域偏在があるんです。やはり西条や八本松のように大学や製造業がある地域にはたくさんいらっしゃいますが、すこし離れると、そんなに多くいらっしゃるわけではないんですよ。

市全体の子どもたちに、そうした環境をどのように体験させていくのかというのは、大変重要な話であると思います。ありがとうございました。

坂越委員、お願いします。

<坂越委員>

長嶋委員の後を受けて、アイデアを一つだけ言いますと、できるだけ外国と姉妹校を作って、姉妹校ができるとICT、インターネットで合同授業もできますし、対面、対話もできるので、このような仕組みを学校の中で考えてもいいのかなと思います。

<高垣市長>

ありがとうございました。高校では各校に一校ずつ姉妹校があると思います。姉妹校というのは一つのきっかけになると思います。

さて、最後になりましたが、5番目です。「市全体を生涯学習のキャンパスに」ということ

で、津森教育長からお願いします。

<津森教育長>

はい。これまでも着実に進めてきておりますので、その流れを切らすことなく進めていくことが大事かと思いますが、ここでもやはりキーワードは大学との連携になるかなと思います。

<高垣市長>

ありがとうございました。では、渡部委員、お願いします。

<渡部委員>

今、「広大マスターズ」という活動をしておりまして、教育委員会の生涯学習部と連携して、講座を担当させていただいております。こういったものをもっと充実して、そこにたくさんの市民の方も気軽に参加していただけるようになれば良いなと思っております。

もっと専門的なことを勉強したいという方は、大学の「単位等履修生」という制度があって、その先生の授業をずっと取れるという制度がありますので、そういうことを市民の方が知っていれば、専門的な勉強ができると思います。

<高垣市長>

ありがとうございました。織田委員、お願いします。

<織田委員>

私自身、いろいろな講座に参加して、学ばせていただいているんですが、非常に高齢者の方が多いです。私も高齢者に近いかもしれませんが、私よりずっと年配の80歳くらいの方も一生懸命頑張っておられますので、今まで東広島市のやられてきたことが、功を奏しているのかなということを感じています。ずっと続けていただきたいと思います。

<高垣市長>

ありがとうございます。それでは、長嶋委員、お願いします。

<長嶋委員>

生涯学習の中には、音楽を鑑賞したり、美術を鑑賞したりということも含まれると思うのですが、くららができて、新しい美術館もできます。その美術館で、皆さんにいろいろな作品を鑑賞していただく機会がもっと増えると思いますので、それも生涯学習の一環として素晴らしいことだと思います。

<高垣市長>

美術館については、いろいろな議論がありました。持っているものが少ないのに、なぜ美

美術館を作るかということもあったのですが、本市の美術館は、そこで子どもたちが創造性を高めていくような美術館にもなれば良いなということで鋭意整備を進めていまして、多くの企画展を開きながら、ぜひ子どもたちに鑑賞してもらいたいと思っています。

それでは、坂越委員、お願いします。

<坂越委員>

生涯学習といったときに、学校教育とどうリンク・連携させていくのか。学校教育は生涯学習のスタートラインになるということはよく言われますけれども、子どもたちをどう生涯学習に組み込んでいくのかという視点が一つあるだろうと思います。

生涯学習には、大きく「生きがいのための生涯学習」と「学び直しの生涯学習」の二つがあると思います。個人的な見方ですが、「生きがい」の方は、東広島市ではいろいろな形でやっておられて、プログラムもたくさんあると思いますが、「学び直し」となると、渡部委員が言われたように、大学との連携、あるいは企業との連携が必要になるかもしれない。このあたりをどのように組み立てていくかであると思います。

<高垣市長>

ありがとうございます。生涯学習に関しては、市でも様々なカリキュラムを提供させていただいているのですが、今、坂越委員がおっしゃったように、趣味の世界もあれば、学び直しの世界もあり、行政が積極的に皆さんに知っていただくかなければならない、例えば、防災的な教育などの必要性もあります。このあたりについて、少し整理をする必要がある時期に来ているのかなと思います。ご指摘、ありがとうございます。

はい。織田委員、お願いします。

<織田委員>

私は、保護司をしておりまして、中学校のときに非行といいますか、問題があつて、どちらかといえば体を使って収入を得るような仕事をしている子どもがいるのですが、彼らが、「高校へ行きたい」とか、「勉強がしたい」、「しておけばよかった」などと時々口にする必要があります。

そういう子どもに対しても、学び直しの機会を作ってもらえるような生涯学習になればと、常々思っております。

<高垣市長>

本日のトピックスはこれぐらいだったんですが、後で考えてこれをもう一つ加えておけばよかったと思っていることがありまして、先程織田委員がおっしゃったことで、私は一昨日、少年院、少女苑に行ってきたんですね。そこには、家庭環境によって収容されざるを得ないという子どももたくさんいたんです。施設では教育もなされていて、ちょうど見させていただいたんですが、彼らが礼儀正しく受講しているのを見たときに、社会がきちんと後からフォローできる仕組みが必要であると感じました。今、貧困問題など社会的な課題がいろいろ

とありますが、「学びのセーフティーネット」というのを掲げる時代になってきている気がしました。本日はみなさんのご意見を伺う時間が無くなってしまいまして、次回には素案を事務局から提案させていただこうと思うんですけども、このあたりの視点も少し加えながら、案を提示させていただいてご意見をいただければと思います。

どうもありがとうございました。時間も少し超過してしまいましたが、大変貴重なご意見をいただきました。

今後の日程ですが、11月に第2回、12月に第3回ということで、非常にタイトなスケジュールとなっておりますが、会議を開催いたしまして、意見交換を行い、方向性を共有した上で、大綱のとりまとめに入りたいと考えております。

今後ともどうぞよろしく願いいたします。

最後に、他に何かご意見があればお願いします。

<織田委員>

幼児教育の無償化に関してですが、おむつがなかなかとれなかったり、偏食があったりといった場合に、これまでは、親がどうにかしようとしてきたものが、今後ますます幼稚園などに任せきりになる傾向が見えるということを知りました。かつては親が、どうにかしようと子どもに関わって行く姿勢を見せていたものを、保育所や幼稚園にお任せになっていったら、これから親子の関係はどうなっていくのかと少し心配しています。

<高垣市長>

家庭の役割を小学校、中学校の義務教育等、学校の役割に押し付けるという問題がありますけれども、家庭の役割というものもう一度きちっとする必要があると思うんですよね。この総合教育会議においては、幼児期から高齢者までどう教育を展開していくのかを、このあたり大綱に書き込んでいけるかということになるのではないかと思います。

幼児教育に関しては、幼稚園、保育所の役割と併せて、家庭の役割というものがあると思いますが、無償化が予定されている中、この一年で少し変わってきているものがあると思います。もう少し研究してみます。

それでは、これをもちまして、本日の日程を終了いたします。

次回の総合教育会議は、11月13日の10時からを予定しております。どうぞよろしくお願い致します。

本日はこれにて閉会いたします。皆さん、長時間にわたりましてありがとうございました。

○閉 会